

子どもの心を育てる学級経営

～ カウンセリングを生かした理論と方法～ (都留文科大学教授 河村茂雄)

by かっちゃん

・最近気になること

1. 学校不適應になった子どもたちは、その後どうなっているのだろうか？
 - ・ 社会不適應になっていることが多い
2. 市民カウンセリング講座等の参加者は何を求めているのだろうか？
 - ・ カウンセリングの理論や技法を学ぼうとしている人は少ない。「自分は何をしていけばいいのか」= 自分の生き方を模索している
3. 企業で、ミドル層がスキップされるのはなぜだろう？
 - ・ 1990 年頃 (バブル期) の、経済的な頂点に達する前に貢献した人々の特徴は、「まじめで一生懸命。上司に言われたことに一直線に取り組み、手堅くやる」ということ。ところが、現代はそれだけでは十分とはいえない。変化に対応できる人材が望まれている。

・現代は何が問われる時代なのか

- ・ 三つの気になることの最大公約数をとれば、「自分」、「生き方」というものにたどり着く。
- ・ 今の時代の変化は、長い歴史の中で見れば小さな変化。しかし、自分の親の生き方をモデルにできない時代になった。小・中・高生にとって、「この生き方は安心、間違いない。」というモデルがいくつあるだろうか。
- ・ 時代も世の中も、あらゆるものは「変化する」ということが事実であり、これが今、我々に突きつけられている。変化に対応するために、「自分で選択・判断しなければいけない」、すなわち、「自己責任」の時代になったということである。
- ・ 今の小・中・高生が大人になる頃は、どんな時代なのか。その時代を生きていくためには、どんな力 (生きる力) が必要なのか。「主体的に生きていくことができる力」が必要だろう。

・これからどんな時代がやってくるのか

- ・ 今の子どもたちが働き盛りになるのは、2020 ~ 2025 年頃である。その時、次のような社会が予想される。

1. 超高齢化社会

- ・ 65 歳以上の人々が総人口の 7% 以上いる国 = 老化している国 (高齢化社会)。すでに日本は 1970 年代に 7% を超えている。14% を超えると、「超高齢化社会」と呼ばれる。

例) スウェーデン	7%	14%	・・・	85 年	かかった	高福祉への準備	ができた
イタリア		”		60 年		”	
ドイツ		”		50 年		”	

- ・ところが、日本はわずか20年ちょっとで倍(7% → 14%)になってしまった。(様々な準備ができずに、今の時代を迎えたということになる。)
- ・現在は、15人で1人の老人を介護しているが、2025年は、2人で1人の老人を介護していかなければいけない。その時に、家族の在り方が問われることになり、その中で、自分の生き方もまた、問われることになる。
- ・高齢化と自殺の関連も深い。自殺は、4年続けて3万人を超えている。その内訳として、65歳以上がとても多い。(日本の65歳以上の自殺者は世界ワースト2位〔常にワースト3以内〕)。なぜなのか。それは、日本は、老人がどう生きていけばいいかが確立していない国だからである。(急激な高齢化についていけないということ) 一昔前までは、65歳前後に亡くなる人が多く、「老後」を考えなくてもすむ時代であった。しかし、今は平均寿命も延び、誰もが「老後」を考えなければならない時代になった。「老後」の生き方をモデルとして見ていないために、どう生きていけばいいのかわからない。高齢者の自殺の理由として、病苦(病気になって医療費が払えない等)は少数。むしろ、家族と同居している人の方が自殺が多い。その理由は、「豊かな社会であるが、老人だけが取り残されている」、「例えば3世代同居で、同じ屋根の下に住んでいるのに、ホテル住まいと同じように、家族間交流・ふれあいが無い」ということなどが挙げられる。
- ・これからの社会は、「家族の在り方が問われる」社会でもある。

2. 国際化社会

- ・日本の従来コミュニケーションスタイルは、諸外国とは異なる一種独特のスタイルがあった。それは、「察する」こと(「皆まで言うなよ。’)を大切にすスタイルということである。
- ・現代は、若い人と中年、若い人同士のコミュニケーションがとれなくなっている。それは、従来の「察する」スタイルが急激に崩れてきているからである。例えば、会社の上司の気持ちを、若い社員が察することができない、気持ちを汲めない、コミュニケーションが成り立たないということはよくあることである。
- ・今の若者の能力は昔の人と変わらないだけのものである。しかし、同じくらいのコミュニケーションの力だとうまく相手とコミュニケーションがとれなくなっている。(行間・言葉の背景が読めない)
- ・相手の気持ちを「察する」ためには、自分自身が同じような感情体験をしていなければできない。感情体験を共有していないと、「察する」ことはできない。
- ・やがて来る国際化社会においては、短時間で相手とコミュニケーションする力は欠かせない。自分を伝える力が今以上に必要とされる時代がやってくる。

3. 情報化社会

- ・これから先、情報はさらにあふれていく。「情報を選択する力」が要求される。必要な情報を瞬時に、適切に選べない人にとっては、厳しい社会になるだろう。人は価値観に基づいて、いるものといらないものを選択する。選ぶだけの「自分」、「自分」の価値観を持つことが大切になる。
- ・仕事ができる人とは、「仕事の順番の決め方がうまく、いらぬものを捨てるスキルを

持っている」人である。

4. 自己責任を厳しく問われる社会

・現代は、親が子どもの仕事や結婚に口出ししなくなっている。日本ほど、親と子どもの職業がちがう国は他にはない。

・「選ぶ」ということは、自己責任が問われることになる。（「お前が決めたんだろ。」と自分に返ってくる） 「選ぶ」: 今の時代のキーワード

・選ぶことには、葛藤が伴い、そして悩みが生まれる。例えば、三つから一つを選ぶとは、二つを捨てることであり、捨てるでもいいものを見つけることである。

・大学卒の5人に1人はフリーター。昔より職業の選択肢が大幅に増えたから、選べなくなっている。そして、選べない人はどうするかといえば、「同調する」（みんなが選ぶものを選ぶ）。

・自分が決めなければいけないものですら、流行で選ぶ傾向がある。少子化と言われる時代なのに、アイドルのCDがミリオンセラーになる。それは、みんなが同じものを買うからだろう。周りが買っていると「遅れちゃいけない」という気持ちになるのだろう。

< 結論 > 四つの社会を予測し、その中で「生きる力」とは何か

価値観の多様化と言いながら、選べない人はみんなと同じ方向へと保守化している。社会の変化に流されず、自分の価値観をはっきり持っていなければいけない。

これからの社会を生きていくために必要なのは、ある程度の「強さ」、「柔軟性」、「アイデンティティの確立」である。

・自分を確立する（生きる力を育む）ために、必要なことは何か

1. 対人関係・対人交流

・人は、他の人との交流の中で、自分のイメージができていく。

・価値観を通じ合える親友との交流を通して、自分が見えてくる。周囲の人からのフィードバックが大切である。

2. 集団生活

・人とかかわらずに自覚していく「自分」は偏る。人とかかわっていく中で自覚されていく「自分」は、拡がりを持つ。

・集団生活をしていくことは、知らないうちに人に迷惑をかけていることであり、「関係ないだろう」では、すまされないし、生きていけない。迷惑をかけてはいるが、それも「お互いさま」。人はそうした中で生きていく。

・人づきあいに悩む人が、いくら本（「人とうまくつき合う心理学」など）を読んでも自分のものにならない。本に出てくる相手は、感情がそこで止まっているからうまくいくが、実際の相手は、体も感情も動いている（起伏がある）。

・人づきあいの仕方は、体験して学んでいくしかない。これができる空間が「学校」である。

・うまく人づきあいできない子どもたちが、「学校不適應」となる。学校を世の中からなくせば、学校不適應はなくなる。しかし、学校をなくすと、肝心なところが育たない。自己を確立する場として、一番適しているのが現代においては「学校」である。

・子どもたちの自己を確立するために、一番取り組みやすい(やりやすい)のが「学級集団」を生かすということである。人との交流や体験学習は「心の教育の最右翼」といえる。

・学級経営とカウンセリング

・学級という集団の中で、対人交流や体験学習を進める際に、カウンセリングの理論や技術を使っていくと効果的である。

・1991年、文部省が不登校の捉え方を「全ての子どもに不登校は起こりうる」と変更した。今現在、普通と思われる子どもも、昔と比べると対人関係がとれていない子どもが多い。学校生活に適應していけない可能性を秘めているということである。こういう子どもが30～40人集まる現代の学級では、今までのやり方だけで学級集団を作っていくことはできない。(リーダーを中心に、自然発生的に手段が作られていくということはまれ) 学級集団を作るヒントが、カウンセリングの中にある。

・そうした子どもたちに「抵抗を起こさせないようにしながら指導・援助する必要性がある」ということで、「カウンセリングが効果的ですよ」というと、顔をしかめる教師も多い。ところが、学級経営に使えるカウンセリングは、教育実践と表裏一体の関係にある。

・カウンセリングには、三つの段階がある。「治療的カウンセリング」(神経症患者に対してなど)、「予防的カウンセリング」(例：入学した子どもに対してのオリエンテーション等)、「開発的カウンセリング」(子どもたちの自己の確立を援助するもの)である。そして、今、学校で必要なのは「予防的カウンセリング」と「開発的カウンセリング」であり、その二つを合わせて、「育てるカウンセリング」と呼ぶ。この「育てるカウンセリング」が、全ての子どもに必要である。

・学級経営をすれば、自然に子どもたちが育つのではない。集団(学級)を育てるための理論と法則が必要である。対人関係の力の弱い子どもたちが30人集まればどういう状況になっていくのかという法則性はあるし、それに見合う対応もある。

・学級集団を育てる理論

1. 心の教育の促進は、学級の中での対人関係、交流を通じた体験から

・子ども同士のつながりのあるクラスは学級崩壊にならない。

・人が集まっているのは、「群集」という。「集団」は、最低限のマナーと行動様式を共有している人々の集まりのことである。マナーと行動様式を系統的に教えていくことで、学級はまとまっていく。

・カウンセリングの理論や技術を知らない人でも、自然にうまく学級集団を育てている人がいる。しかし、名人だからできるというのではなく、全ての教師が子どもの自己を育てる部分を盛り込みながら実践できるようにすべきであり、そのためには、カウンセリングの理論や技法がヒントになる。

2. 体験の意識化

- ・知識や技術の学習は一人でもできる。しかし、集団体験・対人関係に関しては、一人ではできない。せっかく学校という場に集まっているのだから、集団体験を取り入れて、そこで体験したことを必ず「意識化」させることが大切である。
- ・体験は、いろいろなところで行われている。しかし、「楽しかった」「苦しかった」等で終わることが多い。体験を体験のままで終わらせてしまっているのもったいない。「今おもしろかったのはなぜ?」、「今楽しかったのはなぜ?」と問うことによって、意識化させていく。すると、体験が「経験」として残っていく。
- ・体験を意識化して経験としておとし、それを積み重ねていくことによって、醸し出されるのが「生きていくための知恵」である。「知恵」とは、生きていく上で、生きていく中で使われるものであり、また、知識をうまく使っていくために必要なものである。
- ・様々な情報(本・インターネット等)の中で知り得ないものがある。例えば、両親はどのように職業を選んだのかなど、その人の価値観・感情・周辺のいろいろな思いは、口コミで伝わるものであり、インターネットで知ることができるものではない。そして、それらは知恵の背景となるものである。
- ・体験から積み上げられた「知恵」は、新しいことがあったときに生かしていける。
- ・「知恵」の背景にあるものは、自分の価値観である。

・学級集団を育てる具体的な手だて

- ・「うちの学級ではできない」、「一部の子どもたちにだけできるのだろう」というのではない。その状況、子どもたちに合うやり方がある。

1. 子どもの行動特性を前提にして

- ・現代の子どもたちには、次のような行動特性がある。「自分が確立できない」、「同調性」(良いことも悪いことも、周りに合わせる)、「自己選択できない」(1人では選べないと不安になり、3・4人でくっつく)
- ・行動特性を前提とした体験・交流を行えば、学級は崩壊しない。
- ・学級崩壊をしないクラスの担任のデータを集めたところ、共通項があった。それは、「子どもたちにきちんと体験や交流の活動をさせていた」、「行動特性、心理特性を前提に事前の手を打っていた」ということである。
- ・学級崩壊に関しては、「どうすれば崩壊するか」「どうすれば崩壊しないか」の方法がある。現代の子どもたちの心理として、「傷つくこと・失敗することをおそれて、新しいことに取り組まない(挑戦しない)」、「恥をかきたくない」、「友達にバカにされたくない」、「(新しいことをするとき)イメージができない」等がある。これを前提とすると、「やり方を事前に詳しく説明する」、「これならできそうという簡単なレベルからやってみる」などの具体的な指導が見えてくる。例えば、集中できない子に対して、ほんの少しの時間でも集中できることから始めるなども、具体的な指導である。

2. 教師としての指導性を

・教師は、子どもたちが抵抗なくかかわれる技術を身につけていくべきである。その一つが「構成的グループエンカウンター」である。エンカウンターは、どちらかというところ漢方薬のようなもの。即効性ばかりを求めない。また、何でもかんでもエンカウンターということではない。

・「今、学級のここが弱い」という部分をつかむ（実態把握，アセスメント），その上で，「何をどのように取り入れ，どのようにやるのか」を考える（方法） 学級の状況をつかむ方法の一つに「アンケートQU」が開発されている。

3．学級に役割を

・学級集団が忘れがちなもの（軽視しがちなもの）として，係活動（役割の付与）がある。この係活動がよくできている（しっかり根付いている）学級は，良い状態にある。なぜかといえば，学級は小さな社会であり，みんなが過ごしやすくするためには，役割を果たさなければいけない。係活動がスムーズということは，お互いが役割を分担して，集団に寄与し，過ごしやすくなっているということである。

・係活動は，「集団に貢献している」「集団の一員なんだ」という実感を持つきっかけになる。小さなことを，みんなが全体に寄与していくことが大切である。

終わりに

21世紀の心の教育をリードしていくのは，東北・北海道だ！

なぜなら，

・厳しい自然環境のもと，協力し合う（し合わなければいけない）物理性が残っている。（雪かきなど）

・どこの誰なのか，素性がわかる人間関係，濃い人間関係がある。

日々の生活の中で，「当たり前のことを当たり前に行っていくこと」の大切さを忘れずに

教師は，教育に関してのスキル・専門性を高めていくことが求められている

このまとめは，秋田・カウンセリング公開講演会「子どもの心を育てる学級経営～カウンセリングを生かした理論と方法」で行われた河村茂雄先生の御講義から引用したものです。